

「東京ビエンナーレ 2023」において講演を行いました (2023/10/30)

テーマ：東京ビエンナーレ、国際芸術祭、関東大震災
会場：エトワール海渡リビング館（東京都千代田区）

2023年9月23日から11月5日にわたり、「東京の地場に発する国際芸術祭 東京ビエンナーレ 2023」秋会期が開催されました。

東京ビエンナーレは、2年に1度、世界中から幅広いジャンルの作家やクリエイターが集まり、東京を舞台に開催される国際芸術祭です。今回は「リンケージ つながりをつくる」をテーマとし、東京都心北東エリアを中心に、約4ヶ月にわたって様々な作品の展示やイベント、パフォーマンスが行われました。

アーティストと災害地域の住民たちによる活動を記録した展覧会シリーズ「つくることは生きること」の一環として、未曾有の大災害となった関東大震災から100年の節目となる今回、会期最終週の10月30日に、シンポジウム「つくるものが生きること 2023：震災100年、その時アートは」が開催されました。当研究所の村尾修教授（国際防災戦略研究分野）は其中で、「災害・復興・防災：関東大震災からの100年」と題し、講演を行いました。海外の事例を交えながら、過去日本が経験してきた災害からどのように首都圏が復興を遂げ、拡大し、独自の文化が養われてきたか、都市史における被災と復興について話し、また登壇者と災害とアート・文化に関して討論しました。



会場の様子



集合写真



パネルディスカッションの様子

イントロダクション：災害とアート—社会とのつながり

吉見俊哉
東京文化芸術委員会委員、慶応義塾大学専攻まちづくり学教授。社会学者として、上野の雑居ビルから都市論、メディア論を展開、日本のカルチャー・スタディーズで中心的な役割を果たしてきた。長く東京大学で教員、大学情報学部長、大学総合センター長、教育企画部長、副学長などを経て、現在、デジタルアーカイブ学長を務める。主な著書に『都市のドラマツルギー』（河出文庫）、『博物館の政治学』（講談社学術文庫）、『万葉と戦後日本』（講談社学術文庫）、『根拠と反米』（岩波新書）、『アメリカの国土学』（公文堂）、『震災都市の再読考』（岩波書店）、『五輪と戦後』（河出書房新社）、『東京震災』（集英社新書）、『東京復興ならず』（中公新書）、『敗者としての東京』（筑摩書房）などがある。

第一部：都市・建築の「非常時の歴史」—災害・復興・防災

村尾修
1965年横浜市出身。横浜国立大学大学院。東京大学生産技術研究所助手、筑波大学システム情報学教授を経て、2013年から現職。災害に対応した都市・建築空間の再考を目的とし、国内外における災害後の都市復興や都市防災計画研究に関わっている。主な著書に『建築・空間・災害（2013）』『地域と都市の防災（2016）』などがある。2014年日本建築学会賞（論文）、2016年日本建築学会教育賞（教育賞）を受賞。現在、地域安全学会会長、NPO法人地域防災推進機構理事。

五十殿利治
社会・美術史研究者。1953年東京生まれ。1975年早稲田大学第一文学部卒業。1978年北海道立近代美術館学芸員。1985年筑波大学芸術学講師。専門は近代美術史。1996年『大正期新興美術運動の研究（スライド）』が『毎日出版文化賞』受賞。2017年筑波大学定年退職。現在、専任教授。同年『非常時のモダニズム』（東京大学出版会）により芸術選奨文部科学大賞。2018年～22年独立行政法人国立美術館理事。2022年『大正十四部—モダニズムの転機に立つ『富嶽画』』（せりふ書房）。

登壇者紹介

写真：杉山亜希子（写真事務所「ゆかい」）
文責：村尾修（国際防災戦略研究分野）